

<新刊紹介>成清良孝著 『烏兔匆匆』

鈴木, 斌 / スズキ, アキラ

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

47

(開始ページ / Start Page)

118

(終了ページ / End Page)

118

(発行年 / Year)

1993-07-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019681>

成清 良孝著

『烏兔匆匆』

鈴木 斌

教育と文学の二つの道をひたすら歩み続けた著者三八年の記録である。練りに練った達意で、歯に衣着せない鋭利な批評精神に満ちた文章となっており一気に読ませる。

一九四八年の青春の日から一九九二年までの文章を収めている。著者の故郷の柳川の風景、人間交流を描くと共に、さらに高校教育における古典授業のあり方のみならず、国語教育、高校教育全般、現代文学に対する批判や提言。また、長谷健に対する思いと評価、自身の小説と巾広い分野に及んでいる書である。

福岡第一師範卒で、小学校教諭となった著

者は、様々の屈折した思いから田山花袋の『田舎教師』に自身を投影させて読んだことが記される。当時は、今と異なり小学校教諭に対する社会的評価は低かった。しかし、著者はそれにとどまらず、中学、高校教諭として十全に活躍していく様を書く。特に古典教育では芭蕉に対する批判が鋭い。それは、万葉の歌人に比較すれば芭蕉の旅は物見遊山に等しいのではないかとの過激な批判である。

高校教育全般に対しては、教職員組合が高校全入を今も主張していることに対する時代錯誤を強く批判している。なぜなら、今の高校生のかかりの者は本当に学習意欲を持っていない。従って高校中退者が増加しているのは当然ではないか。学習に適していない者には、学校という場だけにとらわれず、それ以外の場を提供する政策が必要ではないかとの提言は注目される。長く教職員組合に属しながらも、ものの本質はきちんと述べている。この問題については、組合とほぼ同じ発想をしている世間一般、教育行政に対しても批判している。総じて何ものにもとらわれず、自由な発想をしているのが魅力である。

文学教育に関しては、『舞姫』『伊豆の踊

子』批判と共に、『網走まで』は、中年男のいやらしさを描いた作品で、高校生に理解させるのは無理であるとの主張は説得的である。

高校野球については、高野連が自らの規約を破り、選手を時に甘やかし、かつ酷使もし、全体的にはお祭り騒ぎをしているとの批判。

長谷健については、個人的な恩義を感謝しつつも、彼の文学の特質と限界を冷静に暖かい心をもって描いている。

「ある文学老年の日常」は、一種の私小説だが、人間全体に対する深い愛に満ちた作品である。

題名からのみ考えれば、人生の終末を前にしての書ともとれるが、感傷性が一片もなく、現代日本の病巣、ことに偽善を鋭くえぐり出した書である。できれば、文学に関するエッセイは、稿を改めて作品全体を論じていけばより厚みが増すものとなるだろう。

(すずき あきら・一九六六年卒)

(一九九二年四月 溪声出版刊・一五〇〇円)

▽著者 1956年卒。